第１部創作昔ばなし

佳作

どんどろ山のあか

蓮見国彦

むかしむかしのことじゃった。

どんどろ山にあかっちゅう名前のたぬきがおったそうな。そのたぬきは、体は黒かったが、しっぽの毛だけが真っ赤じゃったので、村人からそうよばれていたんだと。あかは、えらくいたずらなたぬきで、いっつも悪さをしては、村人を困らせておったんじゃ。

畑の野菜を食ったりするのは、まだかわいいもんで、時にはいろんな物に化けたりして、みんなをからかったりするんじゃ。

お地蔵さまに化けておそなえのだんごを食っちまったり、村人になりすまして、旅人にうその道を教えたり、手におえんたぬきじゃった。

とくにおトキばあさんなんか、えらいめにあった。昼寝をしておったところにあかがぼうさんに化けて行き、おきょうをとなえだしたんじゃ。すると、それを見たもんが、おトキばあさんが死んだと思って村人がいっぺえ集まった。そんでもって、みんなが悲しんでいる最中、ばあさんが大あくびしながら急に起きたもんで、みんなびっくりして大騒ぎじゃった。

そんなこんなで村人は、もうかんかんじゃ。いたずらだぬきのあかををつかまえべえっちゅうことになって、山のあちこちにわなをしかけた。

そんなある日、村人の佐吉といいなづけのサキがどんどろ山にたきぎ取りに行った時のことじゃ。山から降りて来て川っぷちを歩いていると、どこからともなくしくしくと鳴き声が聞こえてきた。

「佐吉どん、今の聞いたか？」

「ああ。おらも聞こえた。そこら辺を探してみるべえ」

二人が辺りを探すと草むらの中に、わなにかかっ

ているたぬきがおった。
「あっ、しっぽが真っ赤なたぬきじゃ」
「ほう、これがうわさのあかだべ。いい気味じゃ。さんざん村で悪さをしよって。どれ、あかをつかまえて、みんなでたぬき汁にして食っちまうべ。」
そういうと佐吉は、あかのわなをはずし、手足をなわでくるくるっとしばった。
「どうか助けてください。もう悪いことは、しませんから。お願いです」
あかは、目に涙をいっぱいためて、たのんだそうな。
「佐吉どん、あかを助けてやるべ。おら、見てたら、なんだかかわいそうになってきた」
「いんや、なんねえ。今までさんざん村で悪さしとったのをサキも知っとるだべ」
「お願いします。二度と悪いことは、しませんから、助けて……」
手足をしばられ、草むらに転がされたあかは、大きな涙をぼろぼろこぼした。
「佐吉どん。おらからもお願いだ。あかを助けてやってくろ」
サキがあんまり熱心にたのみこむもんで、佐吉は、あかのなわをほどいてやった。
すると、あかは佐吉とサキの方を何度も何度も振り返りながら、ぴょんぴょん飛びはねながら森の中に帰って行ったそうな。
そんなことがあった次の日のことじゃ。
あかはサキに礼を言おうと、どんどろ山から下りて、家の前までやって来た。さて、中に入ろうとした時、サキの家の中から庄屋どんとそのせがれの茂助が出てきた。この二人は根性が悪く、村では嫌われもんの親子なもんで、あかは、あわてて茂みにかくれた。そして、二人の話を聞くともなしに聞いた。
「お父っつぁん。うまくいっただな。」
茂助は、にやりと笑った。
「ああ、やつら、わしが貸したまさかりを壊してしもうたと思い込んどる。初めから刃先の割れ易い安物とは知らずにな。あれは家宝のまさかりだから、

べんしょうしろと言ったら、言葉もでんかったわ」
「でも、おかげでおサキどんは、おらの嫁ごになるんだ。わはははは」
わらいながら帰る二人の後ろ姿をあかは、じっと見つめておった。
あかはサキのことが気になり、家の中の様子を障子の穴からこっそりのぞいてみた。
そこにはサキとお父っつぁん、それに佐吉もいた。
「どうすべえ。庄屋さまから借りたあのまさかりが、まさかお殿さまから頂戴した家宝だったとは。それも、百両もするんだとか……。それをわしは壊しちまっただ。今のわしんとこに買って返せるような大金はねぇし……」
お父っつぁんは頭を抱え込んだ。
「そんでもって、おサキどんが庄屋さまのとこの茂助どんの嫁ごなるなら許すって、言ってきたんだべ。ほんとか、お父っつぁま？」
佐吉はサキのお父っつぁんににじりよった。
「お父。もし、おらが嫁にいかなんだらどうなるんじゃ。おらは佐吉どんの嫁ごにはなれんのけ？」
「ああ、かんべんしてくれ。おサキ、佐吉どん……」
「お父、おらどうしたらええだ……」
サキの目からぽろぽろとこぼれた。
「おいらにまかせてください」
そこに障子を開けて入ってきたのは、あかじゃった。
「あっ、おめえは、いつかのたぬき…」
「庄屋親子は、初めからおサキどんを嫁にもらうことが目的です。おサキどんのお父っつぁんに貸したまさかりは初めから壊れ易い安物だと言っていましたよ」
「あんだって！そんな手まで使って、おサキどんを嫁ごにしようと……。あの庄屋のやつめ」
佐吉は、拳を握りしめてくやしがった。
「命を助けてもらった恩返しを今度は、おいらがやる番です」
「気持ちはありがてえが、たぬきのおめえに何ができるちゅうだ。おサキどんを守れるちゅうだか？」

「おいらにいい考えがあるんです」
そう言うとあかは、なにやら三人にひそひそ話をした。

いよいよサキが茂助の嫁ごになる日が来た。サキの家には庄屋どんと茂助が、迎えのかごを連れてやって来た。サキは、きれいな着物を着せられているが、ずっと泣きどおしじゃ。お父っつぁんや佐吉に別れを告げると、サキはかごに乗せられ、庄屋どんの屋敷に向かった。
しばらくすると、かごはどんどろ山のあやかしの森にさしかかった。
森の中は、昼間じゃというのに、木々がうっそうと繁り、うす暗いところじゃ。
「おお、ここはいつ通っても気味が悪いのお。こげなところは急いで行くだ」
庄屋どんたちは、足早に森を抜けようとした。
すると、急にかごの中からけたけたとわらい声が聞こえてきたんじゃと。茂助はサキに声をかけた。
「あれ、おサキどん。さっきまで泣いておったのに、どうしただ？そげな笑い声をたてて。ははあ、さては、おらの嫁ごになるのがうれしいんだべ」
「はあ、この日が来るのを首を長〜くして待っていただ」
「うれしいこと言ってくれるだな。どれ、めんこい顔を見せてくれんか？」
そう言って茂助がかごをのぞくと、サキはにこりとわらった。だが、次の瞬間、首がひょろひょろと伸び、くるくると茂助の体に巻きついた。
「首が長いだべ〜？」
「うわあああーっ！ろくろっ首じゃ。おサキどんは化けもんじゃ〜！」
茂助や庄屋どんが叫ぶと森の奥から声が聞こえた。
「化けもんならここにもおるぞ〜」
ぶきみな声と共に、庄屋どんたちの目の前には天を見上げるほどの一つ目の大入道が現れた。そして、でっけえ足がどすんどすんとみんなをふみつぶそ

うとした。庄屋どんたちは、あわてて逃げようとしたが、今度は真っ赤な顔をした天狗、そして、おそろしい鬼やかっぱも現れ通せんぼじゃ。
「こりゃたまらん。こんな化けもんの嫁ごはいらんわい～～！」
庄屋どんやかごかきは、あわてて逃げ出した。
この様子を草むらに隠れじっと見ていた者がおった。それはサキと佐吉じゃった。
「あか、うまくいっただな」
草むらから姿を現したサキが、ろくろっ首のサキにむかって声をかけた。
ろくろっ首は、にこりとわらい、くるっとでんぐりがえしをした。すると、どろんと白いけむりが出て、たぬきにかわった。かごに乗っていたのは、サキに化けていたあかだったんじゃ。
「えへへ。おいらの変化（へんげ）の術もいいことに役に立てましたね。みんなも出てこいよ」
あかが合図すると、一つ目大入道や天狗などの化け物が、どろんとけむりとともに、たぬきのすがたを現した。みんなあかのなかまが化けたものじゃった。
その後、庄屋どんたちは二度とサキの前に現れることはなかった。
こうして、サキはあかに助けられ、ぶじにいいなずけの佐吉の嫁ごになったということじゃ。
それからというもの、どんどろ山では、あかの悪さの話は、とんと聞かれなくなったそうな。
そればかりか、そんなことがあってからは、おなごのたき木拾いを手伝うたぬきのすがたが、時々見られるようになったんじゃと。